

# 18年 の 歩み

バグウォッシュ会議

核兵器開発の道をさぐる科学者の国際会議「第十五回バグウォッシュ・シンポジウム」が、二十八日から九月一日まで京都市・国立京都国際会館で開かれる。被爆国日本で初めて開催される意義は大きい。これを機会に、バグウォッシュ会議の十八年の歩みをふりかきしてみた。

## 科学党宣言

### 国・信条の違いを超え 核の危険性を訴え

朝日新聞 1975年2月25日

人類絶滅が可能な水爆兵器出現という水爆時代がはじまった。米ソの冷戦時代という危機を背景にして、この宣言は核兵器と戦争の廃絶のために「あれこれの国民や大陸や信条の一員としてではなく、その存続が疑問視されている

の一人として東西両陣営の科学者が一堂に集まって原子力国際会議の開催をひらくことを呼びかけたのである。

それが三年後、ラッセルの猪意にこのバグウォッシュ村に「自分自身の良心」(ラッセルの言葉)だけを表して十九回二十二人の科学者が集まってきたのだ。日本から湯川秀樹、朝永振一郎、小川岩雄の三物理学者が、はるばる出席した。民間の自然科学者の会合とはいえ、この冷戦時代に米ソの科学者が、核兵器や平和問題について意見を交換す

るの、はじめてのことであつた。この一回の会議は三つの小委員会にわかれ、原子力の危険、核軍縮、原子力時代の科学者の責任を討議したのである。

第一回会議に湯川、朝永両氏とともに出席した小川岩雄立教大教授は当時の思い出を語り、「被爆国日本から代表がくるといふので熱烈的な原子力禁止を主張するのではないかと心配していたようですが、こちらは、ピキニ死の灰以来の精密な放射能測定分析のデータをもつていって冷静に科学者らしく話したので評判はよかった。冷戦時代なのに米ソとも感情的でなく、客観的、冷静さがまず前面に出て、さすが自然科学者だとは思ったものです。この結果、核時代でも科学者間にコミュニケーションがなりたつという自信を強めました。このとき核実験による放射能は、白血病と骨がんの発生率をまやかし、次の世代に遺伝的影響を残すことが確認され、のちの部分核実験停止条約のきっかけを作ったのです」

こうして原子力生みの親である物理学者たちが、一方では核全面軍縮と戦争廃絶の平和運動の生みの親ともなったのである。その一年後の一九五八年九月二十日、第三回バグウォッシュ会議は、ウィーンで開かれ、有名なウィーン宣言を発表した。この宣言は「戦争の必要性」と題され、はつきりと核戦争だけでなく戦争そのものをなくすことを宣言していた。このため科学者が、専門家として政府のために働くだけでなく、世論や政治指導者に原子時代の危険性や諸事実を伝える自発的究極者の役割を果たすよう全世界で一致して手をなす必要があるを呼びかけていた。

これをなくした物理学者坂田昌一博士は「科学党宣言」と命名したのだ。

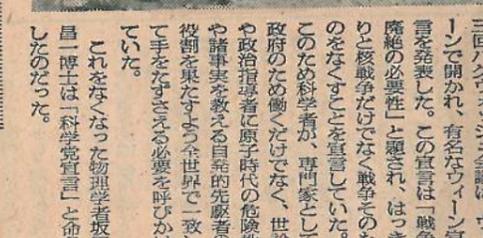
バグウォッシュ村、一九五七年七月七日  
カナダのバグウォッシュ村にあるエドワーズの静かな入り江の小さな漁村に、二十二人の外国人の科学者があられた。この村は昔の道子、栗山を思わせる静かな荘地で、ふだんはめったに訪れる人もない。この日か三日間、アメリカの億万長者、サイラス・イトンの別荘で徹夜で続けられた米ソを含むこれらの科学者たちの熱い討論から、この村の名前は、一瞬、世界の歴史に残ることになった。

この三年前の一九五四年三月一日―西太平洋のピキニ環礁から百六十キロ東方で、日本のマクロ線船第5号福丸が、アメリカの水爆実験で「死の灰」をあげた。人類

この宣言は、ラッセル、アインシュタイン(発表数週間前になく

なっていたに、湯川秀樹、マツ

第1回バグウォッシュ会議の参加者。日本からは小川(左端)、朝永(左から4人目)が出席。湯川(円内)は遅れたので、記念写真には入っていない。(1957年、カナダ・バグウォッシュ村で)



第1回バグウォッシュ会議の参加者。日本からは小川(左端)、朝永(左から4人目)が出席。湯川(円内)は遅れたので、記念写真には入っていない。(1957年、カナダ・バグウォッシュ村で)

c092-17-037